夢通信

第７号(2017／11／10)

住民流福祉総合研究所（木原孝久）
埼玉県入間郡毛呂山町毛呂本郷1476－1
http://juminryu.web.fc2.com/

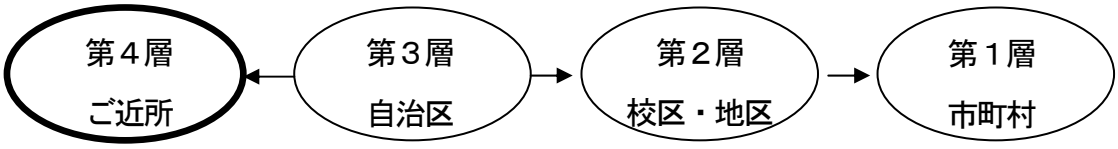
自治会を「活動体」から「司令塔役」へ

■宮崎県小林市で、ご近所福祉の新しい実験

自治会活動の革命を起こそうと、日本の南端で、ある実験が始まった。地域末端で行われている福祉活動と言えば、自治会だ。ここで会食会やふれあいサロンが行われている。ところが、ここへは要援護者は来ていない。要援護なのだから、無理なのだ。ではどうしたらいいのか。その下の層である「ご近所」でやればいい。そこで活動を自治会圏域からご近所圏域へ降ろそうという試みが、宮崎県小林市で始まろうとしている。

■福祉実践の主役を自治会から各ご近所に移行へ

地域は以下のように、４つの層からできている。地域福祉を成功させるには、それぞれの層の独自な役割と、層間の関係をきちんと理解する必要がある。



そう考えた時、特に自治区のあり方が問題だ。これまで自治会といえば、自治区が最後の層ということで、自治区全域を「一つのコミュニティ」と捉えて、自治会館を拠点に、町民全員を対象とした活動・事業をするのが当たり前になっている。福祉関連ならば見守り活動、食事会、サロン、移送サービス、老人クラブや子ども会活動などだ。

しかし現実には、自治区の後に第４層がある。「ご近所」だ。福祉活動の対象である要援護者はこの第四層で生活をしていて、周囲の住民の助けを得て自立生活ができている。彼等にとって自治区の食事会やサロンは遠すぎて行けない。行けないことはないが、やはり要援護なので段々足が遠のいてしまう。自治区で福祉活動をしても、対象者不在の活動になりかねない。

一方の担い手もまた第４層にいて、そこで活動している。特に福祉では頼りになる世話焼きさんも、自治区までは行かず、ご近所で要援護者に関わっている。人材は自治区ではなく、ご近所にい

るのだ。その結果、自治区以上の圏域での活動は人材不足に悩むことになる。

ではどうしたらいいか。結論は出ている。自治区で活動を立ち上げるよりも、各ご近所毎に、それぞれのご近所の人たちにやってもらえばいいのだ。ご近所には世話焼きさんがいるのだから、足元の要援護者の要望に沿って活動を組み立てればいい。わずか５０世帯の範囲での活動だから、やりやすい。

そこでこれから求められるのは、自治区の関係者が、自治区圏域でやっていた事業を、ご近所毎の活動に切り替えていくことである。そのために各ご近所の要援護者や世話焼きさん、両者の関わり合いなどをマップ作りで調べ、それを大事にしながら助け合いのご近所づくりを応援していく。フォワードからミッドフィルダー（司令塔）の役に変わるのだ。

■サロン会場は遠くて要援護者は参加できていない

このほど宮崎県小林市で支え合いマップ作りをした時に、このテーマにピッタリの事例が見つかった。

２００数十世帯の自治区で、当初、役員らは、（ご近所毎にでなく）２００数十世帯をひとまとめでマップ作りをすることを望んだ。元々そういう考えで自治活動が行われてきたからだ。

しかし予想された通り、いくつかの問題が見えてきた。ふれあいサロンは町内で一カ所開かれていたが、遠い所からは参加してきていないことがわかってきた。それぞれのご近所内の要援護者や周辺の人たちの関わり合いも、まだ見えているとは言えない。

自治区として各種関係組織による推進組織も作ってあるが、あまり機能しているとは言えないようだ。人材の選び方に問題があることを役員らは承知していた。サロンについては、各ご近所から連絡員を選出しており、それ自体は良いことなのだが、やはり人選に問題があって、あまり機能しているとは言い難い。

そこで私が、冒頭で説明したような、地域の実態を説明してみた。地域は四層に分かれていて、最も大事なのは当事者と世話焼きさんのいるご近所で、自治区はその活動をバックアップするミッドフィルダーであるべきだということをだ。

■「自治会を司令塔に下げる」ための５つの計画

驚くべきことに、役員たちはこの話に即座に反応した。一人の役員が、自分が住むご近所の一角を指さして、「この人が、世話焼きさんですよ。周りの人たちのゴミ出しを一手に引き受けてくれていましてね。この人を中心にして、このご近所でサロンを開いてもらおうかと考えています。ご近所福祉推進もお願いしようかなと」。

彼がやろうとしていることを整理すると、次のようになる。

❶これからはご近所毎に、そのご近所内の人たちでご近所福祉を推進してもらう。ご近所自治だ。
❷推進の人材は、天性の資質の持ち主で、しかも現実にその機能を果たしている人にする。
❸ご近所活動も、こちらから活動を指定し、やり方を指示するのでなく、既に住民がやっていることをバックアップする側に回る。
❹ふれあいサロンも、ご近所毎に、ご近所の人たちの手で開いてもらう。
❺ご近所の助け合いの実態を改めて把握するために、これからご近所毎に支え合いマップを作る。

■自治会の推進体制も天性主義で

とりあえずはモデルご近所を選出して、そこから「ご近所の人たちによるご近所福祉の推進」をやってもらう。そして今の自治会の役員体制は、機能的にはフォワードからミッドフィルダーに下がる。各ご近所での自治活動をバックアップする役である。

自治会では、町内の各組織から選出された人たちで推進協議会が作られてあるが、前述の通り、役員らはこれがあまり機能していない理由を承知していた。人の選び方に問題があると。そこでこれからは、こういう場合の人材の選出の仕方を根本的に改めることにした。機能主義と天性主義だ。生まれ持って福祉活動のセンスを持ち合わせていて、しかも実際に活動をしている人を選出してもらう。もしこれができれば、地域福祉の大革命。天性主義と機能主義は私どもが様々な機会をとらえて主張しているが、関係機関には受け入れられていない。望ましいことだろうが、現実には難しいということだ。

■子ども会や老人会もご近所毎に。サロンは班ごとに

これと関連した取り組み計画案が、小林市の他のご近所でのマップ作りで出てきた。

マップの中で、子ども会に加入している子を探してみたら、小学生に限れば、わずか数名。しかしこれに中高生まで加えると全部で１５名になった。

子ども会というのは町内圏域で作られている。それならば一定の人数がいて、一応子ども会としては成り立つ。しかし各ご近所からは活動拠点は遠すぎるし、お互いに親しみにくい。

地域としての連帯感を育むには、それぞれのご近所毎に再編成されるのがいい。小学生に限定するのなら、組織としては成り立ちにくいが、この際中高生も加えて、中高生がリーダー役を引き受ければ、子ども主体の子ども会になる。同じようにして、老人クラブも、ご近所毎に再編成した方がいい。ふれあいサロンも、できればもっと小さい範囲ごとに開いたらどうか。というわけで、そのご近所ではまずは「班ごとのサロン」を立ち上げようということになった

「おつき合いの流儀」はこう改めたら？

■「助け合いができるおつき合い」にするために

■これでは日本人は助け合いは不可能！

私が住民流の助け合いを講じるとき必ず持ち出すのが、「あなたのおつき合いの流儀は？」である。「自分や自分の家族の問題は隠しておきたい」など１０の項目が並んでいて、「私もそうだ」と思ったら丸印を、違うなら×印をつけてもらう。大抵は７～８つの項目に丸印がつく。だから日本人は助け合いができないのである。

ならばどうしたらいいのか、という疑問に答えて、この１０項目を引っ繰り返したものを提示してみたら、大変興味を持たれた。以下のとおりである。

❶我が家の問題を周りに打ち明けよう。

当事者が打ち明けてくれないことには、助けの手を差し伸べようがない。

❷自分のことを敢えて噂話のタネにしてもらおう。

徘徊者を見つけてもらうには、沢山の人に知ってもらわねばならない。

❸困ったら、思い切って「助けて！」と叫ぼう。

日本人の善意は受け身型。「助けて！」と言われて初めて手を出せる。

❹助けてもらうために、迷惑かけ上手になろう。

助けてもらおうとすれば相手に面倒をかけるのは仕方がない。お互いさまだ。

❺人助けをしたければ、詮索の鬼になれ。

相手は必死に隠す。対抗上、詮索するぐらいでないと困り事は見つからない。

❻「口が堅い」のも、よしあしだ。

困った人を助けるには、情報を皆で共有する必要がある。

❼お節介こそが、本当の思いやり。

助けてと言えない日本人。積極的に助けの手を差し出さないと助けられない。

❽引きこもりの人を救いたければ、こじ開けよう。

嫌われても敢えて助けるために踏み込む人こそが、本当にやさしい人だ。

❾プライバシーを尊重していては、相手を助けられない。

プライバシーの中に深刻な問題が隠れている。そこに踏み込むのが福祉だ。

❿助け合いたいのなら、お互いの家をひらき合おう。

「ほどよい距離」を置いてのおつき合いでは、助け合いは始まらない。

マップづくりで何を知りたいのか？

■住宅地図に向かう前に、まず“目的”を定めよう

■「１時間３０分」を効率的に活用するために

一回のマップ作りで使える時間はわずかに１時間３０分。これ以上長くなると疲れてしまう。しかし１時間３０分はやはり短すぎる。どうすればいいか。目的を絞る以外にない。何に絞るのか。

以下のどの目的に絞ったらいいのかは、マップ作りの前に作り手たちで協議して決定するが、場合によってはマップ作りが始まってから、今日はこの方法がよさそうだと分かってくる場合が多い。その時はまた、他の仲間と協議する必要がある。

❶そのご近所の本質的な福祉課題を見つける。

いわば急所を突き止める。「そうか、このご近所の問題はこれだったのだ！」と。そのために個々の「気になる人」のことは脇へ置いておく。

❷「気になる人」を大雑把に抽出した後、その中から当面の関わりの対象を抜き出す。

当事者に関する必要な情報を徹底的に聴き出し、対応策も考える。

❸とにかく「気になる人」をすべて抽出し、とりあえずは課題のみを羅列する。

こういうやり方を取る人も少なくないが、これだと、これまでの「要援護者マップ」と同じものになってしまうので、すぐに次の機会を設けて、それぞれの対応策を考える。

❹「気になる人」に限らず、ご近所の問題を一つか二つ抜き出し、対応策を考える。

そしてその問題の解決行動を取り始める。①のように本質的な問題であるかどうかまでは踏み込まない。活動を始めるためのテーマを探そうということだ。

❺マップ作りの前に既に出ている特定の「気になる人」や「気になること」に照準を合わせる。

その問題の内容や対応策のヒントのみを探す。ケアマネジャーが対象者の地域での生活状況や住民との関わり合いについてだけ知りたいという場合がこれにあたる。

❻「今日は子どもの問題を考えよう」「今日は女性の問題に絞って考えよう」とテーマを設定する。

マップ作りは大抵は高齢者の問題で終わってしまうが、こういう場合、次回は子どもの問題、その次は女性の問題というように、それぞれのマップ作りのテーマを特化させるといい。

◆支え合いマップを作っている方のための情報②

当事者に聴く、ご近所さんに聴く

■マップ作りで「作り手主導」にならないために

■担い手主導の癖がついてしまっている？

私共は、支え合いマップを手早く理解していただくために寸劇を考案した。受講者に演じてもらうことで、マップに親しんでもらうというメリットもある。この寸劇を使ったグループ学習も考えた。寸劇で出てきた課題にどう取り組んだらいいのかを考えてもらう。「買い物に不便している」「食生活が貧しい」「徘徊中の認知症の人をどう見守るか」など。各グループの案をテーマ別に集約して、評価する。

そこで一つ、問題が出てきた。取り組み企画は案外、どのグループでも容易に出てくる。しかし彼等が考え出す解決策は、こちらが期待していたのと違うものも少なくない。

支え合いマップ作りとは、住民の支え合いの実態を調べることである。その支え合いの実態を生かして課題の解決策を考えるのだ。当事者や周辺の住民が問題にどう対処しようとしているかを読んだ上で、その意向に沿った解決策を考える。あくまで当事者主導、ご近所さん主導で進めるのである。なぜならば、それらの問題解決策に実際に取り組むのはそのご近所の当事者であり、周りの人たちだからだ。

ところが、グループ作業をしてもらうと、当事者や周囲の人たちの意向や行動を考慮せず、自分たちの好きなようにアイデアを出し合う傾向が見られる。たしかにご近所さんの意向を考えに入れなくていいのなら、いくらでもアイデアは出てくる。しかし実現可能性という面からは、どうだろうか。

そこで最近は、グループ作業をしてもらう前に、以下の３つの点を説いて、これらを頭に入れて考えてほしいと呼びかけているが、残念ながら、あまり効果が見られない。私たちは、担い手の側から考える癖が身についてしまっているのだ。改めて、マップ作りで課題の解決策を考えるときに留意すべきことを並べてみよう。

❶当事者はその問題をどう解決しようとしているか。どういう行動を取っているか。
❷周りの人は、その当事者にどのように関わろうとしているのか。どう関わっているのか。
❸その問題の解決につながりそうな人材や施設等の資源がないか。

この３点に該当する事実をできる限り集めて、そこから解決策を考えるのだ。